# 最強塾

The Complete Lesson

（埼玉県児玉郡上里町）

カフェと言われても信じてしまうようなポップなインテリア。

## 熱い情熱を秘めたクールデザイン

最寄りのJR上里駅までは車で10分。決して塾に適している立地とは言えない。確かに近くに競合する塾がいないことはメリットだろう。しかし、教室展開のセオリーから言えば、ここはあまりにもかけ離れている。なぜ、彼はあえてここに塾を開いたのか。それは理想とする教育を追求するためだった。

〝最強塾〟という無骨なネーミングに、かわいらしい教室。塾長の小峰達也氏は、2009年まで群馬県の某大手塾で6年間講師をしていた。「もっと一人ひとりの生徒としっかり向き合いたい」と感じて、2013年3月に独立した。

生まれ育った場所でもなく、いま住んでいる場所に近いわけでもない。もともと勤めていた塾が開校しておらず、そのほかの大手塾もまだ進出していない土地を探していたところ、この場所にたどり着いた。

生徒数や指導法は、一人ひとりに向き合いたいという思いから、15坪のスペースを3つに分けた。一番奥には掘りごたつ式の教室。真ん中には、普段は個別指導や自習スペースとしても使うが、ときには壁一面の黒板を使い集団指導もできる。一番手前のスペースは面談や2名までのクラス指導にも使えるスペースにしている。

〝最強塾〟という屋号とは裏腹な、かわいらしいデザインは生徒たちにも好評で、見学に来た生徒は100%入塾するという。もちろん小峰氏の人柄や教育方針に共感したことも大きいが、生徒たちが最強塾に通っていることを学校で自慢する時に、必ず話題になるのが「あのオシャレな塾？」というから、最強塾の注目度がいかに高いのかがうかがえる。

屋号に〝最強〟を使ったのは「自分に勝てる者は最強」であることを生徒たちに伝えたかったから。常に自分と向き合い「先週よりも出来るようになったか」「自分が成長していることを自覚しているか」を意識させるためだという。

いくら良い授業をしても、いくら親身に面倒をみても、最終的に自分自身が奮起しなければ伸びるものも伸びない。これまで何度も悔しい思いをしたからこそ、その思いを屋号に込めた。

マスコットになっている〝ラーテル〟には、世界中を旅している時にアフリカで出逢った。「世界一怖い物知らずの動物」としてギネスブックにも認定されている生き物で、この塾名にマスコットとしてラーテルを起用することに迷いはなかった。

これからも常識にとらわれずに、自分に勝てることに気づいて、自ら行動できる子どもたちを育てていくことが小峰塾長の夢だという。

思い切って独立したのだから妥協はしたくなかった。初めから大きな塾を目指すのではなく、見えない細部にまでこだわって自分の体の一部のような教室を作りたかった。それが形となって、わずか1年で地域の子ども達に愛される塾となった。色んな意味で常識を覆す塾だからこそ「ここに通いたい」という生徒が後を絶たないのだろう。

“堅い”塾名をかわいらしく表現している。

## 細部にこだわり、随所に工夫を凝らした教室

随所に塾長のメッセージが記されている。

本棚には英語の書籍も並ぶ。

奥の教室の入口は道場のようにお辞儀をしないと入れない。

壁一面が黒板となっていて普段は生徒が今日やることを書いて授業に向かう。

教室の間仕切りには、小峰氏が世界中を旅行した時の写真が貼られている。

集団教室は掘りごたつになっていて、床下に収納スペースもある。

窓ぎわのスペースも生徒が多い時には可動式の間仕切りで教室として使う。

◆全国学力テスト・児童生徒アンケートで、平日に携帯電話やスマートフォンで1時間以上、通話やメール、インターネットをするのは小6で15.1%、中3では47.6%に上ることが分かった。中3で4時間以上使う生徒は10.8%で、数学Aの平均正答率は55.7%だったが、使用時間30分未満の15.9%の生徒の平均正答率は72.7%だった。小6でも4時間以上使う生徒の算数Aの平均正答率は66.6%、30分未満の正答率79.8%。テスト結果と比べると、使用時間が長いほど、成績が低い傾向が出た。